The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鹿児島県甑島里方言の終助詞
Author(s)	白岩, 広行; 門屋, 飛央; 野間, 純平 他
Citation	阪大日本語研究. 2017, 29, p. 187-215
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』29（2017）

鹿児島県甑島里方言の終助詞

Sentence Final Particles in the Sato Dialect of Koshikijima Islands, Kagoshima

白岩 広行・門屋 飛央・野間 純平・松丸 真大
SHIRAIWA Hiroyuki・KADOYA Takateru・
NOMA Jumpei・MATSUMARU Michio

キーワード：終助詞、間投助詞、相互承接、平叙文、疑問文

要旨

本稿では、甑島里方言の終助詞全般について包括的な記述を試みた。平叙文に生起する終助詞には、ア、ター、ガ、ド、ヨ、ソ、ナがある（このうちヨ、ソ、ナは平叙文以外にも生起可能）。これらの終助詞が相互に承接する場合、おおむねア・ター・ガ・ド／ヨ・ソ／ナの順で、ヨ・ソがア・ター・ガ・ドの後に、ナがさらにその後に位置する。意味的な特徴もふまえると、アは標準語の「わ」、ターは「じゃないか」、ガは「じゃないか」と「よ」、ドは「ぞ」、ヨは「よ」、ナは「な」に似たものと考えられる。また、ソは非文末で間投助詞として使われることが多い。疑問文に生起する終助詞にはカ、ナがある。カが独話的な疑いを表すのに対し、ナは聞き手への問いかけで使われる。このほか、勧誘文だけに生起する終助詞ヤがある。

1. はじめに

本稿では、鹿児島県薩摩川内市甑島の里集落で話されている方言を対象に、終助詞全般の包括的な記述を試みる。本稿は、大阪大学・九州大学の若手研究者14名（大学院生やポスドクなど）を中心に組織した甑島方言の共同調査班の成果のうち、筆者ら4名が担当した終助詞に関する調査結果をまとめたものである。共同調査班全体の成果は森・平塚・黒木編（2015）『甑島里方言記述文法書』として報告書にまとめているが、これは文法の全般を概観したもので、終助詞に関する記述はごく簡潔なものにとどめざるを得なかった。そこで、調査で得たデータを十分に生かした、より具体的な記述として、本稿をまとめるものである。

記述にあたっては、個別の終助詞に関する深い記述でなく、終助詞全般の包括的な記述を目指す。藤原（1982; 1985; 1986）のような直観的な手法によるものをのぞくと、近年の方言終助詞の記述研究には個別の終助詞を深く掘り下げたものが多く、一方言内の終助詞全般を包括的に記述したものは少ない。包括的な視点からの記述には、富山県井波方言における井上優（2006）や山形市方言における渋谷（2016）があるが、いずれも、それまでに積み重ねた個別

形式の詳しい記述がもとになっている。また、多くの場合、研究者自身がその方言の母方言話者であり、自らの内省をデータにできるという利点がある。

それに対し、本稿では、個別の終助詞に関する記述は浅くとも、終助詞全般を広く記述することを優先した。それは、もともと筆者らを含む共同調査班が里方言の包括的な記述文法書（森・平塚・黒木編 2015）の作成を目的としていたためである。また、筆者らは里方言の母方言話者ではなく、調査で得たデータの範囲内でしか分析ができないという制約がある。この点を逆説的にいえば、非母方言話者による調査をもとに、その方言の終助詞の全体像をどれだけ記述できるかを、本稿は示すことができると考える。

本稿では、井上優（2002）や近年の方言終助詞研究の手法をふまえ、生起する文のタイプ（平叙文、疑問文、勧誘文など）や終助詞相互の承接関係について整理したうえで、各終助詞の意味を素描するという手法をとる。個々の終助詞の記述は大づかみなものにせざるをえないが、里方言の終助詞の全体像を可能な範囲で把握したいと考える。

以下、2節で調査方法を示したのち、3節で里方言の終助詞を列挙し、形態面の特徴などを確認する。その後、4節では平叙文に生起する終助詞、5節では疑問文に生起する終助詞、6節では勧誘文に生起する終助詞の順に記述をおこなう。最後に7節で全体をまとめる。

2. 方法とデータ

終助詞の意味は、その文を発した本人以外には必ずしも明確に理解されるものではなく、自然談話からの分析には限界がある。そのため、里方言話者と面接して内省を尋ねる形で調査をおこなった。具体的には、標準語の例文を里方言に翻訳する形、ないし、里方言で作った例文について適格性を判断する形で、話者の内省を確認した。

どのような話者に調査をおこなったかについては、表1に示すとおりである。複数回にわたって多くの方にご協力いただいた。調査項目が多岐にわたるため、各話者にすべての調査文の内省を求めたわけではないが、同じ調査文に対する内省を複数の話者に尋ね、原則として話者ごとに内省の差がないことを確認したうえで分析をおこなった。ただし、一部の例文については、内省に個人差のあることを明示したうえでデータを挙げている。

各例文について、話者の内省をもとに、不適格な文を*、文自体は適格だが文脈にあわない文を #、不適格とはいかないまでも不自然さを感じる文を？で示す。内省に個人差のある文は％で示す。また、例文の文脈は［　］、例文の標準語訳は（　）のカッコで示している。終助詞のなかには標準語に直訳しにくいものもあるが、意味的に近いと思われる訳をあてた。特に断りのない限り、本稿で示す例文はこの面接調査で得たものである。

調査にあたっては、調査文が膨大な数になったため，話者の負担を考えて文の述語部分だけの回答を求めることもあった。そのような形で得た例文では、述語部分以外の情報を文脈として［　］のカッコ内に示している。

表1　調査協力者一覧

話者	生年	性別	外住歴	調査時期
里01	1929年	男性	なし	2012年9月、2013年9月、2014年2月、2014年9月
里02	1933年	女性	16-19歳：串木野市	2012年2月、2012年9月、2013年2月、2014年9月
里03	1944年	男性	15-35歳：兵庫県神戸市	2012年2月、2014年2月
里13	1931年	女性	47-52歳：鹿児島市	2014年9月
里15	1933年	男性	なし	2013年2月
里17	1939年	女性	15-21歳：鹿児島市	2012年9月、2014年2月
里19	1940年	男性	15-19歳：牧園町	2012年2月

※外住歴にある市町は、ことわりのない限り鹿児島県内（平成の市町村合併前の前の市町名）。甑島では、中学卒業後の進学・就職で島外へ出るのが一般的であり、外住歴のない話者は少ない。

この面接調査のほか、共同調査班全体で甑島諸方言の談話資料を整備した。里方言については約5時間分の談話を文字化したので、必要に応じてこの談話資料のデータも利用した。談話資料を分析して明らかになったことも多く、特に、終助詞相互の承接関係（4.1節）、終助詞ソの記述（4.7節）については、談話資料の例を中心に論を進めている。談話資料から引用した用例については、そのむねを用例に付記した。本稿で引用した談話資料の例は、表1に示した調査協力者、ないし、その知人たちが地元の人間どうしで話した場面のものである。

記述にあたって、各言語形式はカタカナ書きで示す。本文中では必要に応じてアルファベットによる音素表記も用いるが、この音素表記は森・平塚・黒木編（2015）によるものである。音素表記には音韻形態論的な分析も反映されているが、本稿ではそこに深く立ち入らないので、その詳細は森・平塚・黒木編（2015）を参照されたい。また、標準語の表現を引き合いに出すときは、方言形式と区別し、ひらがな表記のうえ「　」で括って示す。

3. 使用される形式と形態面の特徴

本節では、まず筆者らの調査で使用が確認された里方言の終助詞をすべて列挙する（3.1節）。その後、終助詞全般の形態的特徴について示す（3.2節）。各終助詞のうち、ナ、ネ、ア、ソに

ついては、それぞれ具体的分析の前に特記すべき事項があるため3.3節以降でそれを示す。

3.1. 使用される形式

平叙文に生起する終助詞には、ア、ター、ガ、ド、ヨ、ナがある[1)]。下に、これらの終助詞が動詞イク（標準語「行く」相当）に後接した例を示す。アは、3.5節で示すとおり、動詞イクに後接したときイカーという形をとる。

（1）イク｛ター／ガ／ド／ヨ／ナ｝。　《平叙文生起の終助詞（ア・ソ以外）》

（2）イカー。　《平叙文生起の終助詞ア》

また、面接調査では例が得られなかったが、その後に整備した談話資料にソという終助詞が見られた（3.6節で示すとおり、本稿におけるソのデータは、主に談話資料による）[2)]。

（3）［近所の人が家を作ろうとして作らなかったという話］

ソイデ、　ツクラセトイヤイギーニャ、　○○サンドモモ　ヨカッタトソ。

（それで、（大工に）作らせていらっしゃれば、○○さんたちもよかったのよ。）

（談話資料より）《平叙文生起の終助詞ソ》

これらのうち、ヨ、ソ、ナは平叙文以外にも生起するが（4.2節）、本稿ではひとまず「平叙文に生起する終助詞」として平叙文に生起した場合を中心に4節で分析する。

疑問文に生起する終助詞には、カ、ナがある[3)]。このふたつの終助詞には疑問の意味があり、その文が疑問文であることを示す。ナという形式は平叙文などにも生起するが、3.3節で示すように、疑問を表すナは疑問を表さないナと区別して記述する。

（4）［財布を拾って］タローノ　サイフヤイヨーカ。（太郎の財布だろうか。）

（5）［時間を尋ねて］ニジヤイナ。（二時か。）

5節で示すが、カは非文末で疑問節の表示にも使われるため、終助詞とは見なしがたい面がある。しかし、文末に生起する場合を中心に、一連の終助詞と同様に分析をおこなう。

このほか、勧誘文だけに生起する終助詞としてヤがある[4)]。

（6）［友達を誘って。一緒に旅行に］イコーヤ。（行こうよ。）

以上、里方言で使われる終助詞をひとまず列挙した。多くの終助詞があり、すべての詳細な記述は難しいが、本稿では調査で明らかになった範囲のことを記述する。

3.2. 形態面の特徴

これらの終助詞は主文末にあたる様々な箇所に生起する。本稿に先立つ森・平塚・黒木編（2015:152）には、-ru（動詞の非過去の接尾辞）、-ka（形容詞の非過去の接尾辞）、-ta（過去の接尾辞）のいずれかに後接するという記述があるが、勧誘や命令の形にも後接することを考

えると、その記述は不十分であった。主文末に生起することは、そもそも終助詞の定義であり、標準語の終助詞と同様に捉えられる。

そのうえで、特に記すべきことに名詞述語への接続がある。勧誘文専用のヤ以外の終助詞は、名詞述語文に生起することがある。その場合、ヨ、ナ、カは繋辞（コピュラ）を介さず直接名詞に後接しうるが、それ以外の終助詞は繋辞ヤイを介さないと名詞述語に接続できない。次の例は、「ヨカテンキ（いい天気）」という名詞述語に各終助詞が後接したものである（なお、アは繋辞ヤイに後接したときヤラーという形をとる。3.5節参照）。

（7）ヨカ　テンキ｛*ア／*ター／*ガ／*ド／ヨ／ナ／カ｝。　《名詞に直接後接》

（8）ヨカ　テンキヤイ｛ター／ガ／ド／ヨ／ナ／カ｝。　《繋辞を介して接続》

（9）ヨカテンキヤラー。　《繋辞を介して接続（終助詞ア）》

談話資料でのみ例を得られたソについては、名詞に直接後接する形と、繋辞を介する形の両方が見られた。下の（10）は名詞相当の準体助詞トに直接後接した形、（11）はトに繋辞（過去形のヤッタ）を介して接続した形である。

（10）［漬物作りについて］アシタ　ソイテ　ホンズキャー　スイトソ。

（明日、そして、本漬けはするのよ。）　（談話資料より）《名詞に直接後接》

（11）ヒハンスイトヤッタソ。（批判するんだったよ。）

（談話資料より）《繋辞を介して接続》

つまり、ソ、ヨ、ナ、カは、名詞のように活用を持たないものにも直接後接できるが、それ以外の終助詞は動詞や繋辞といった活用語にしか後接しないということになる。

平叙文に生起する終助詞のうち、ヨ、ソ、ナは非文末で間投助詞として使われることもある。

（12）キューワ｛*ア[5]／*ター／*ガ／*ド／ヨ／ナ｝、マゴ　クイチャイガ、…

（今日はね、孫が来るんだけど、…）

（13）ソガン　イーヨッタイバソ、　○○サンノ　モッテ　キヤッタイヨーガ。

（そう言ってたらさ、○○さんが持って来られただろうが。）　（談話資料より）

本稿は終助詞としての例を中心に記述するので、間投助詞としての記述には深くふみこまない。ただし、4.7節で示すとおり、特にソは間投助詞として使われることが多いようである。

以上、里方言の終助詞を列挙し、その形態面の特徴について、全般的なことを簡潔に整理した。以下、個別の形式について、具体的な分析に入る前に特記すべき事項を示す。

3.3. 平叙のナと疑問のナ

里方言の終助詞ナの例には、4節で示すとおり、標準語の「な」に似たものが多い。

（14）［外に出たらよい天気だった］ヨカ　テンキヤイナ。（いい天気だな。）　《平叙文》

（15）［友人に時間を聞かれ、自分の腕時計を見て］ニジヤイナ。（二時だな。）　《平叙文》

一方で、標準語の「か」のように疑問の意味を表す場合もある。次の例の「ニジヤイナ」は、標準語の「二時だな？」に相当するような、見込みを持って確認するものではない。見込みを持たず単に問いかけるもので、標準語の「二時か」に近い意味を持つ。

（16）［腕時計を持っている友人に時間を尋ねて］ニジヤイナ。（二時か。）　《疑問文》

これと同様に単純な疑問を表す終助詞ナは、鹿児島市方言でも報告されており（木部・久見木1993参照）、（16）のナもそれと同種のものと考えられる。

形態面に違いがないため、平叙文のナと疑問文のナを別形式と見なす必然性はない。しかし、意味面を考慮すると両者を区別したほうが整理のついた記述ができると考え、本稿では疑問の意味を表さないナを「平叙のナ」、疑問の意味を表すナを「疑問のナ」と便宜的に呼び分けることにする。

このようなナの意味の違いは、イントネーションによって表し分けられるようである。図1、図2に示すのは、話者「里01」が「ニジヤイナ」という文を、平叙文の例文（15）と疑問文の例文（16）の2とおりの文脈で読み上げた音声の波形である。

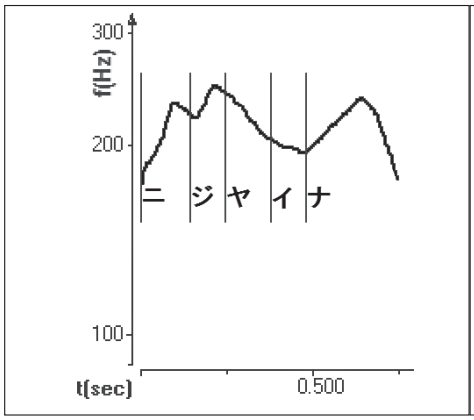

図1　平叙文の「ニジヤイナ」（例文15）

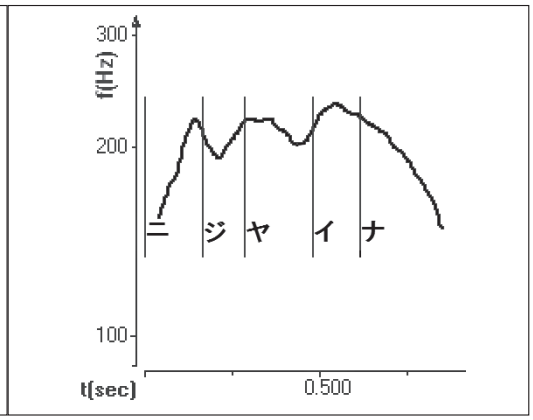

図2　疑問文の「ニジヤイナ」（例文16）

この図に示すとおり、平叙のナは文末の「ナ」の拍で上昇したあと急激に下降するイントネーションをとる。一方、疑問のナは、文末の「ナ」の拍で単に音が下降する。図2の疑問のナの下降幅は大きく見えるが、筆者（白岩）の聞く限り、聴覚的には平叙のナほど急激な下降には感じられない。このように、同じ「ニジヤイナ」という文であっても、疑問の意味を含むかによって終助詞ナのイントネーションは異なる。

もっとも、図1と図2では、「ナ」だけでなく「ヤイ」の部分からイントネーションが異なる。

かつ、ナの生起した場合に限らず、鹿児島方言の疑問文は下降調をとりやすいことが知られている（木部・久見木1993）[6]。つまり、このようなイントネーションの問題は、終助詞ナだけに限ったものではなく、平叙文や疑問文全般の問題とも考えられる。また、調査した限りでは、平叙のナと疑問のナはおおむねイントネーションで区別されるように感じられたが、すべての例文でイントネーション面を精査したわけではない。したがって、常にイントネーションの違いが関わるのか明らかではないが、ナの意味を理解するうえで重要なことと考えたため、本節でそれを示した。

本稿では、このようなイントネーションの違いもふまえたうえで、平叙のナを4節、疑問のナを5節と、分けて記述する。

3.4. 終助詞ネについて

3.1節では挙げなかったが、ナに似た終助詞としてネも使われる。ネにも、ナと同様に、疑問を表さない場合と表す場合がある。

（17）［外に出たらよい天気だった］ヨカ　テンキヤイ｛ナ／ネ｝。（いい天気だな。）

（18）［腕時計を持っている友人に時間を尋ねて］ニジヤイ｛ナ／ネ｝。（二時か。）

ただし、ナが里方言本来の形式と意識される一方で、ネについては、どの話者からも「標準語的な感じがする」という内省があった。

談話資料の実例を見ても、ネは、やや標準語的なスタイルの文脈に多くあらわれる。

（19）［地元の話者どうしの会話だが、録音を開始したばかりで緊張がある場面。方言調査をするなら、もっと早くしたほうがよかったという話題］
コノ　キキトリワ　オソカッタデスネ。　ジュ、ジューネンマエダッタラ…
（この聞き取りは遅かったですね。十年前だったら…）　（談話資料より）

（20）［昔の人と今の人のあいさつのしかたについて話している］
オジギバ　シテ　イッテタケド、　ソイジャナイノネー。
（（昔は）お辞儀をして言ってたけど、（今は）それじゃないのね。）　（談話資料より）

（21）アンチャンタチワー　スゴク　アイヤイモイタネ。　タクマシカッタナ。
（兄さんたちはすごくあれでしたね。たくましかったな。）　（談話資料より）

（19）は、録音を開始したばかりで話者が標準語的な「ですます体」で話す場面である。（20）（21）は「オジギバ（お辞儀を）」「ソイ（それ）」「アイヤイモイタ（あれでした）」など方言形の表現もある一方で「イッテタケド」「ジャナイノ」「スゴク」などの標準語形も混じる文である（これらの表現は方言形なら「イーヨッタバッテ」「ヤナカト」「ナマナ」などにあたる）。

これらのことから、ネは標準語的な性格の強い終助詞と考えられる。談話資料にも実例があ

るため、里方言で使われない形式とはいえない。しかし、話者にネに関する内省を求めてもスムーズにいかないことが頻繁にあり、多くの場合、ネではなく、ナを使った例が回答された。そのため、ひとまず本稿では、ネを分析の対象から外すことにする。

なお、談話資料を見る限り、疑問を表さないネの特徴は、おおむね標準語の「ね」と同様のようである。面接調査では、ナが独話でも使えるのに対し、ネが独話では使えないことを確認したが、これも標準語の「ね」と同じ特徴である。

（22）［友人と一緒に花を見ながら］

アジロイカ　ハナヤイ｛ナー／ネー｝。（きれいな花だなあ／ねえ。）

（23）［一人で花を見ながら］

アジロイカ　ハナヤイ｛ナー／＃ネー｝。（きれいな花だなあ。）

以上、標準語的性格の強い終助詞であること、スムーズな内省を得られなかったことをふまえたうえで、本稿の分析対象からはネを外すことにする。

3.5. 終助詞アの述語への接続

ここまでの例文でも示したが、終助詞アは、一見、他の終助詞と違った形で述語に後接するように見える。例えば、下の（24）では動詞イクに、（26）では繋辞ヤイに、（28）では否定辞ンに、それぞれ特殊な形でアが後接しているように見える。

（24）イカー。（行くよ。）《動詞イク＋ア》

（25）ヒヤカー。（寒いよ。）《形容詞ヒヤカ＋ア》

（26）ヨカ　テンキヤラー。（いい天気だよ。）《名詞＋繋辞ヤイ＋ア》

（27）アッター。（あったよ。）《動詞アイ（ある）＋過去辞タ＋ア》

（28）オラナー。（いないよ。）《動詞オイ（いる）＋否定辞ン＋ア》

しかし、実際には、特殊な語形変化は生じていない。上の（24）、（26）、（28）は、それぞれ、iku、jaru、oranuと設定される基底形に終助詞=aが後接したのち、音の交替規則を経て実現した形である。森・平塚・黒木編（2015:37）で示されるとおり、里方言では、uaという基底形の音連続がaaという音で実現する。そのため、基底形のiku=a、jaru=a、oranu=aという音連続が、ikaa（イカー）、jaraa（ヤラー）、oranaa（オラナー）と実現する。なお、アが後接しない場合、ru→iという交替規則[7]により繋辞jaruはjai（ヤイ）、nu→Nという交替規則[8]によりoranuはoraN（オラン）という音で実現する。

このように、各述語に終助詞アが後接した形は、一見すると変わった形に見えるが、それは里方言の音の交替規則によるもので、特殊な語形変化が生じているわけではない。

3.6. 終助詞ソのデータについて

筆者らは、調査に先立って日本放送協会編（1967）『全国方言資料 第9巻 へき地・離島編Ⅲ』に収録された甑島島内（上甑村中甑、鹿島村鹿島）の談話資料を参考に里方言で使用される終助詞の見当をつけ、調査から漏れる終助詞のないように注意した。

しかしながら、終助詞ソについては、調査の準備段階、および、面接調査をおこなった段階でも、ソという終助詞が存在すること自体に気づくことができなかった。ソは、後日、談話資料を整備するなかで発見された終助詞である。ソは非文末で間投助詞として使われることが多いため（4.7節）、文末部を中心にした面接調査では話者の回答にソが出て来にくかったものと考えられる。

いずれにしても、面接調査ではデータを得ることができなかったため、本稿では終助詞ソに限って談話資料を主なデータとして分析をおこなうことにする。

4. 平叙文に生起する終助詞

平叙文に生起する終助詞には、ア、ター、ガ、ド、ヨ、ソ、ナ（平叙のナ）がある。以下、4.1節で終助詞相互の承接関係についてまとめ、4.2節でこれらの終助詞が平叙文以外にも生起可能か確認する。4.3節以降では各終助詞の意味的な特徴を簡潔に示す。なお、3.3節で述べたとおり、本稿では平叙のナと疑問のナを区別するが、本節でとりあげるナは平叙のナにあたるものである。

4.1. 終助詞相互の承接について

平叙文には多様な終助詞が生起するが、まず形の面の整理として、終助詞相互の承接関係についてまとめる。2節で述べたように、本稿の記述は話者の発話意図を把握するため基本的には面接調査で得た例文によるが、承接関係は形の面から整理できることなので談話資料の例を利用して記述する[9)]。

談話資料で2つの終助詞が重ねて使われた例には、ヨが後に承接したもの、ソが後に承接したもの、ナが後に承接したものの3パターンがあった。以下、それぞれの例を挙げる。

ヨが後に承接したものとしては、アヨ、ターヨの例が見られる[10)]。

（29）「イラナーヨ」テ　ユテ。（「要らないよ」って言って。）　（談話資料より）

（30）［若者の礼儀作法について］

シツケヤイモスターヨ。（躾じゃないですか。）　（談話資料より）

ソが後に承接したものとしては、ターソ、ガソの例が見られる。

（31）［苦瓜の佃煮作りを誰がしているかについて］
　　アイガ　シトイタイターソ。（あいつがしているんじゃないか。）　（談話資料より）
（32）［甑島方言の歌を歌った相手に］ソイデ　ヨカガソ、　ホーゲンニ。
　　（それでいいじゃないか、方言（調査）に。）　（談話資料より）

このほか、談話資料中にはなかったが、ドソという承接について、共同研究者の藤本真理子氏（尾道市立大学）が指示詞などの調査の過程で偶然に例を得ている。話者に対する藤本氏の聞き取りによると、ドソという承接を実際に発音するときは、ドの母音を伸ばしてドーソと言うのが自然とのことである。

（33）［雨が］フッテ　キモイタドーソ。（降ってきましたよ。）　（藤本氏提供の例）

ナが後に承接した例としては、アナ、ターナ、ガナ、ドナ、ヨナ、ソナという例が見られた。ナ以外のすべての終助詞に対して、ナが後接しうるということになる。

（34）ナミダン　デモーサーナー。（涙が出ますよね。）　（談話資料より）
（35）アガンタ　トケ、　ヤッパ　イケバ、　ソラ　シマノ　ウツリカワリガ、　マ、　ベンキョー　ナイワケヤイターナー。（あんなところへ、やっぱり行けば、そりゃあ島の移り変わりが、ま、勉強になるわけだよな。）　（談話資料より）
（36）「バーチ　カブイガナー」テ　ヤッタ　トコガ…
　　（「罰をかぶるじゃないか」ってやったところが…）　（談話資料より）
（37）アイコワ　アジロイカッタドナー。（あそこはきれいだったよな。）　（談話資料より）
（38）サムレバ　ナマナ　コワカトヨナー。
　　（（餅は）冷めるととても固いんだよな。）　（談話資料より）
（39）「ソコノ　オヤガ　シンダトヤイ」チューデーソ、　イタトッタワケソナ。
　　（「そこの親が死んだんだ」というからさ、行っていたわけだよな。）
　　（談話資料より）

以上、アヨ、ターヨ、ターソ、ガソ、ドソ、アナ、ターナ、ガナ、ドナ、ヨナ、ソナという承接が談話資料等で確認された。

このような承接関係を整理して図示すると図３のようになる。図３では、承接が可能な終助詞の組み合わせを｝の片カッコで示している。この片カッコは、その左側の終助詞の後に右側の終助詞が承接可能なことを表す。ア、ターの後にはヨが後接可能であり、ター、ガ、ドの後にはソが後接可能である。また、ア、ター、ガ、ド、ヨ、ソのすべての終助詞の後にナが後接可能である。

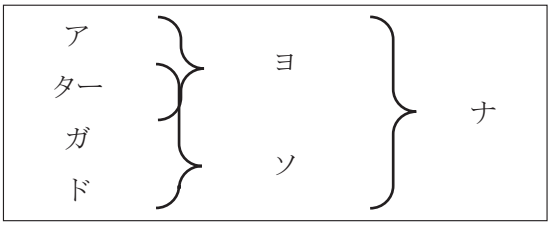

図3　平叙文における終助詞相互の承接関係

なお、3つの終助詞が共起した例は確認されないため、アヨナやターソナのような3つの終助詞による承接が可能かは不明である。また、談話資料に例が確認されないだけで、これ以外の承接が不適格とは限らない。例えば、（33）の例に示したドソ（ドーソ）という承接は、談話資料中には例が見られず、藤本氏が偶然に例を得たものである。しかし、筆者らが話者の内省を確認した限りでも（注9参照）、これ以外の承接のパターンは確認されなかったため、本稿では、ひとまず図3のように終助詞相互の承接関係を整理しておく。

4.2. 平叙文以外への生起

この4節でとりあげる終助詞のうち、ヨ、ソ、ナは平叙文以外にも生起する。以下、面接調査のデータを中心に、様々なタイプの文に生起した例を示す（談話資料では勧誘文や命令文の出現頻度が低いため、談話資料からの分析は難しい）。

まず、ヨは疑問文、勧誘文、命令文にも生起する。

（40）［相手の質問に反発して］オイガ　ソガンタ　コト　シットイカヨ。
　　（俺がそんなことを知ってるかよ。）　《疑問文（Yes-No疑問）》

（41）ドケー　イッキャイトヨ。（どこへ行くんだよ。）　《疑問文（WH疑問）》

（42）［友人を酒に誘って］ノモーヨ。（飲もうよ。）　《勧誘文》

（43）アッチー　イケヨ。（あっち行けよ。）　《命令文》

ナは勧誘文にも生起するが、命令文には生起しない。疑問文に生起したナは基本的に疑問のナと見なされるが、標準語の「かな」と同様に疑問を表すカに平叙のナが後接する場合がある（詳しくは5.1節参照）。

（44）［太郎が仕事に行くか心配して］イクカナ。（行くかな）　《疑問文（Yes-No疑問）》

（45）［孫を誘って。一緒に海に］イコーナ。（行こうな。）　《勧誘文》

（46）［孫に注意して。あっちに］*イケナ。（行け。）　《命令文》

ソについては、談話資料中に疑問文に生起した例が見られた（ただし、文脈的には聞き手に行動を促す勧誘の意味を持っている）。

（47）［方言の歌を歌おうとして］「イゴデッパ」チュー　ウタバ　ウターヤランカソ。
（「イゴデッパ」という歌を歌われませんか。）
（談話資料より）《疑問文（Yes-No疑問）》

勧誘文、命令文に生起した例は見られないが、たまたま談話資料中に出現しなかったという可能性もあり、それらの文におけるソの生起の適格性については判断できない。

ヨ、ソ、ナ以外の終助詞として、話者によっては勧誘文にガが生起可能と内省する場合があったが、これを不適格とする話者もいる。

（48）［友人を酒に誘って］%ノモーガ。（飲もうよ。）　《勧誘文》

ガは西日本を中心とした諸方言で使われる終助詞だが、どの方言でも基本的に平叙文に生起する一方で、鹿児島市方言では勧誘文生起の例が報告されている（太田 2001、松丸 2008:201 参照）。それを考えると、里方言のガが勧誘文に生起しても不思議ではないが、内省に個人差があり、談話資料にも実例がないため、はっきりしたことはいえない。疑問文、命令文におけるガの生起はどの話者も不適格としている。

（49）［相手の質問に反発して］*オイガ　ソガンタ　コト　シットイカガ。
（俺がそんなことを知ってるかよ。）　《疑問文（Yes-No疑問）》

（50）*ドケー　イッキャイトガ。（どこへ行くんだよ。）　《疑問文（WH疑問）》

（51）*アッチー　イケガ。（あっち行けよ。）　《命令文》

ア、ター、ドは、面接調査において、平叙文以外への生起はすべて不適格とされている。談話資料にも平叙文以外に生起した例は見られない。

以上、各終助詞について、平叙文以外に生起した例を挙げた。ヨは疑問文、勧誘文、命令文にも、ナは疑問文、勧誘文にも、ソは疑問文にも生起しうる。一方、ア、ター、ドは平叙文以外には生起しない。先に示した終助詞相互の承接関係とくらべると、おおむね、承接の順番が後の終助詞は、平叙文以外にも生起しやすいようである。

今回の調査では、平叙文以外に生起した場合の意味的特徴までは調べられなかったが、ヨ、ソ、ナが平叙文以外に生起しうるということを意味面の記述に先立って示した。次の 4.3 節から、平叙文に生起した例を対象に各終助詞の意味的な特徴について記述する。

4.3. ア

アは、独話的な気づきや思い出しの場面で使われる。下の（52）は雨に気づいて、（53）は用事を思い出して、アを使う例である。

（52）［一人で部屋にいる。カーテンを開けて］アメン　フイヨラー。（雨が降ってるわ。）

（53）［一人で昼寝しようとしたが、そういえば今日は］ヨージガ　アラー。（用事があるわ。）

このように、その場で話し手が認識したこと（＝気づき）、あるいは再認識したこと（＝思い出し）を表すのがアの基本的な使い方といえる。

このほか、自分がその場で認識した様子を見せることで、聞き手に対して新規の情報を示す場合もある。

（54）［メガネを探している友達に、その場でメガネを見つけて］

ココニ　アラー。（ここにあるよ。）

（55）［勉強しない子どもにむかって］

ベンキョーセンニャ　チャールラー。（勉強しないと（試験に）落ちるよ。）

（54）では、メガネを見つけたことを口に出すことで聞き手にメガネが見つかったことを伝えている。（55）は「試験に落ちる」という自分の認識を口に出すことで子どもに注意している。この場合のアは、聞き手に情報を示すという点で標準語「よ」「ぞ」相当の終助詞ガ、ド、ヨに似ている。

（56）［勉強しない子どもにむかって］

ベンキョーセンニャ　チャールイ｛ガ／ド／ヨ｝。（勉強しないと（試験に）落ちるよ。）

しかし、（56）のガ、ド、ヨが聞き手のいる状況でしか使えないのに対し、アは独話で使えるという点で異なる[11)]。

（57）［勉強しない子どもを見て、子どもに聞こえないところで一人で嘆く］

ベンキョーセンニャ　チャールラー。（勉強しないと（試験に）落ちるよ。）

（58）［勉強しない子どもを見て、子どもに聞こえないところで一人で嘆く］

ベンキョーセンニャ　チャールイ｛＃ガ／＃ド／＃ヨ｝。

（勉強しないと（試験に）落ちるよ。）

（55）の例でアを使った場合、「独り言で心配する様子をわざわざ子どもに聞かせる感じ」という内省を話者から得た。これらのことから、その場で話し手が認識／再認識したことを独話的に表すのがアの基本的な特徴だが、それをわざと聞かせることでその認識を聞き手にむけて示す場合もあるものと考えられる。

その場で決めた自分の行動を表明する場合にもアが使われる。上の例と同様に、独話的に決定した自分の行動を、そのまま聞き手に示したものといえる[12)]。

（59）［買い物に行く係を買って出て］オイガ　コーテクラー。（俺が買って来るよ。）

以上、終助詞アの特徴について簡単に述べた。このような特徴は、標準語研究で服部（1992）や松岡（2010）が示す「汎性語」の終助詞「わ」、つまり、女性語としての「わ」ではなく男女の性差なく使われる「わ」に似ている。また、富山県砺波方言（井上優 1995）、大阪方言（野間2011）、和歌山県南紀方言（大野2010）の終助詞ワにも似ている。語形が似ていることを考

えても、里方言のアは、これら諸方言の終助詞ワと同類のものと位置づけてよいだろう。

4.4. ター

ターは、おおむね標準語の「じゃないか」（田野村1988の「ではないか第一類」）に相当する終助詞で、聞き手に確認を要求したり、独話的に驚きを表したりするときに使われる。

まず、聞き手への確認要求として使われた例を示す。

（60）［道を教える場面で、信号を指さしながら］

ソケー　シンゴーノ　アイター。（そこに信号があるじゃないか。）

（61）［ほら、うちのクラスに山田ってやつが］オッタター。（いたじゃないか。）

（62）［車道を歩く子どもに。そんなところを歩いていたら］

アブナカター。（危ないじゃないか。）

（63）［新しい服を着て来た友人に］ニオートイター。（似合ってるじゃないか。）

（60）～（62）は、互いに持っているはずの「信号がある」「山田というやつがいた」「危ない」という認識の確認を聞き手に求めるものである。（63）は「服が似合っている」という話し手の評価を示し、聞き手にその確認を促す例である。

また、標準語の「のだ」に相当する表現チャイ、サイ、タイ（いずれも準体助詞トと繋辞ヤイに由来する形式）と組み合わさって独話的に話し手の驚きを表す場合もある。次の例では、雨に気づいて驚いたことをサイターで表している。

（64）［独話で。外に出たら雨が降っているのに気づいて］

アメン　フイヨイサイター。（雨が降ってるじゃないか。）

このように、ターはおおむね標準語の「じゃないか」に相当する意味を持つ。「じゃないか」に関する論考のひとつとして三宅（1996）の用法分類にしたがえば、（60）～（62）は「知識確認の要求」、（63）は「弱い確認要求」、（64）は「驚きの表示」の例にあたる。

ただし、確認要求の場合にはター単独で使われるのに対し、独話的に驚きを表す場合には「のだ」相当表現に後接するという点で標準語の「じゃないか」とは異なる。次の例に示すように、「のだ」相当表現の有無によって文意が変わるわけである。

（65）［聞き手に対して］モー　ニガツヤイター。（もう二月じゃないか。）

（66）［独話で］モー　ニガツヤイサイター。（もう二月じゃないか。）

なお、藤原（1985）は九州諸方言の終助詞ターを終助詞タイと関連づけて論じているが、タイは「じゃないか」相当とはいいにくい終助詞である（坪内2001、平川2008）。そのため、里方言の終助詞ターを他の九州諸方言の終助詞タイと同類とは見なしにくい。一方、井上博文（1999）は熊本県砥用町方言の終助詞としてターを挙げ、「じゃないか」という標準語訳をあて

ている。この砥用町方言のターは里方言のターと同類かもしれない。

4.5. ガ

ガは西日本を中心とした多くの方言で使われる終助詞で、おおむね標準語の「じゃないか」（田野村1988の「ではないか第一類」）および「よ」に相当する意味を持つとされる（松丸2008参照）。以下、里方言のガについても「じゃないか」相当の意味、「よ」相当の意味の順に分けて記述する。

「じゃないか」相当のガは、上述のターと同様、聞き手に確認を要求したり、独話的に驚きを表したりする場合に使われる。以下、ターの場合とあわせて例を示す。

（67）［車道を歩く子どもに。そんなところを歩いていたら］

アブナカ {ガ／ター}。（危ないじゃないか。）

（68）［独話で。外に出たら雨が降っているのに気づいて］

アメン　フイヨイ {ガ／サイター}。（雨が降ってるじゃないか。）

「じゃないか」相当の意味を表す点でガとターは似ているが、細かな違いもある。形の面でいうと、（68）のように独話的に驚きを表す場合、「のだ」相当表現と組み合わさるターと違ってガは単独で使われる。

意味面でいうと、ターで聞き手に確認を要求する場合、その発話のあとにさらに次の発話が続くことになる。しかし、ガで確認した場合、次の発話は続かない。

（69）［道を教える場面で、信号を指さしながら］

ソケー　シンゴーノ　アイ {＃ガ／ター}。（そこに信号があるじゃないか。）

［と言って、「その信号の角を左に曲がって…」と道案内を続ける］

（70）［信号がどこにあるか尋ねられて］

ソケー　アイ {ガ／＃ター}。（そこにあるじゃないか。）［と言って、そのまま黙り込む］

（69）のようにターを使うと、信号があることを聞き手に確認したうえで道案内を続けることになる。（70）のようにガを使うのは、信号の場所自体を聞き手に教える場合である。つまり、ターは確認したことをふまえてさらに発話を続ける場合に使うのに対し、ガは確認すること自体が目的の場合に使うものといえる。

また、ガは推量形式のヨーに後接して使われることが多い。ガもターも、ヨーに後接すること自体は可能である。

（71）［あいつは］イクヨー {ガ／ター}。（行くだろうが。）

しかし、談話資料を見ると、ヨーターに対して、ヨーガの例は際立って多い。談話資料中に終助詞ガの用例は48例あったが、うち25例はヨーに後接した例であった。一方、終助詞ターは

全53例のうちヨーに後接した例は2例だけであった[13)]。

面接調査でも、標準語の例文を里方言に翻訳する場合、ガ単独よりも、ヨーガという形が先に回答されることが多かった。話者の内省によると、ガは「荒っぽい」「叱るときのことば」という印象があるが、ヨーガという形にすると、そのような一方的な発話という印象は薄くなって使いやすいとのことである。

（72）ソケー　シンゴーノ　アイ｛ガ／ヨーガ｝。（そこに信号があるじゃないか。）

例えば、（72）の例でガを使うと、目の前にある信号を指差し、聞き手に一方的に確認させることになる。しかし、ヨーガを使うと、あからさまに信号を指差すのではなく、むしろ話し手自身は信号から目を離して、聞き手の目に信号が見えるかどうか反応を確かめることになる。推量形式のヨーを使うことで、聞き手の目にどう見えるか推量して確かめるという意味合いが生じ、一方的な確認という印象が薄くなるようである。

上述のとおりガによる確認の発話の後には次の発話が続かないが、ヨーガという形の場合には、ターの場合と同様に次の発話が続く。

（73）［道を教える場面で、信号を指さしながら］

ソケー　シンゴーノ　アイ｛#ガ／ヨーガ｝。（そこに信号があるじゃないか。）

［と言って、「その信号の角を左に曲がって…」と道案内を続ける］

以上、ターと比較しつつ「じゃないか」相当の意味で使われるガについて示した。次に、「よ」相当の意味で使われるガの例を示す。

（74）［ちゃんと薬を飲んだか聞かれて。うるさいなあ、］ノンダガ。（飲んだよ。）

（74）は「自分は薬を飲んだ」という情報を聞き手に示すもので、標準語の「よ」に相当する意味の例である。似た意味の終助詞にド、ヨ（4.6節）もあり、同じような文脈で使える。

（75）［ちゃんと薬を飲んだか聞かれて］ノンダ｛ド／ヨ｝。（飲んだよ。）

しかし、ド、ヨを使うと単に情報を示すだけなのに対し、ガを使うと「そんなこともわからないのか、と反発する感じ」がすると内省されている。「じゃないか」相当の場合と同様に、「よ」相当の場合にも、ガは聞き手に対して一方的な態度を示すことになる。

次の例でド、ヨを使うと、（76）は「『あったよ』と言いながら相手にメガネを渡す親切な感じ」、（77）は「子どもを単に心配する感じ」の発話と受け取ることができる。一方、ガを使うと、（76）では「メガネをしっかり確認するよう注意する感じ」、（77）では「子どもを叱りつける感じ」の意味合いが生じるという。

（76）［メガネを探している友達に］ココニ　アッタ｛ガ／ド／ヨ｝。（ここにあったよ。）

（77）［勉強しない子どもにむかって］ベンキョーセンニャ　チャールイ｛ガ／ド／ヨ｝。

（勉強しないと（試験に）落ちるよ。）

（76）（77）のガは「じゃないか」相当とも解釈できそうだが、いずれにしても聞き手に対して一方的な態度を示すものといえる。

このほか、自分の行動を示す場合にガが使われることもある。この場合のガの意味については十分に確認していないが、下に例を挙げておく。

（78）［買い物に行く係を買って出て］オイガ　コーテクイガ。（俺が買って来るよ。）

以上、ガは標準語の「ではないか」および「よ」に相当する意味を持つが、（68）のように独話場面で驚きを表す場合を除くと、聞き手に対して「そんなこともわからないのか」と一方的な態度を示すことになる。そのような一方的な意味合いをやわらげるため、確認要求で使われる場合には推量形式のヨーに後接してヨーガという形をとることが多い。

4.6. ド・ヨ

ドおよびヨは、聞き手にむけて情報を示す場合に用いられる。（79）は眼前の事実を、（80）は予測される将来の事態を、（81）は過去の自分の行動を、（82）はこれからの自分の行動を、それぞれ聞き手にむけた情報として示す例である。

（79）［メガネを探している友達に］ココニ　アッタ｛ド／ヨ｝。（ここにあったよ。）

（80）［勉強しない子どもにむかって］ベンキョーセンニャ　チャールイ｛ド／ヨ｝。
（勉強しないと（試験に）落ちるよ。）

（81）［ちゃんと薬を飲んだか聞かれて］ノンダ｛ド／ヨ｝。（飲んだよ。）

（82）［買い物に行く係を買って出て］オイガ　コーテクイ｛ド／ヨ｝。（俺が買って来るよ。）

ガとは違い、形式自体に「そんなこともわからないのか」と一方的に認識を押しつける意味合いはない。ただし、例えば（81）の例で、薬を飲んだかしつこく聞かれて「何度もうるさいな。飲んだよ。」と反発する場合のように、文脈的にそのような意味合いが生じることはある。

ドとヨは、独話状況での使用の可否という点で異なる。ドは、（83）のように新たな事実に気づいたり、（84）のように自分の行動について自ら言い聞かせたりする独話場面でも使用されるが、ヨは使用できない。

（83）［一人で部屋にいる。カーテンを開けて］
アメン　フイヨイ｛ド／*ヨ｝。（雨が降ってるぞ。）

（84）［一人で畑にいる。よーし、畑仕事を］キバイ｛ドー／*ヨー｝。（がんばるぞ。）

また、4.2節で確認したが、ヨは疑問文、勧誘文、命令文でも使用されるのに対し、ドは平叙文でしか使われない。

以上のように、独話状況でも使われること、平叙文にしか生起しないことを考えると、ドは標準語の「ぞ」に似た終助詞といえそうである。また、独話状況で使われないこと、平叙文以

外の様々なタイプの文にも生起することを考えると、ヨは標準語の「よ」と同類の終助詞といえそうである。

なお、調査にあたって多くの話者から「ヨは標準語的な感じがする」という内省が得られた。語形が同じということを考えても、ヨは標準語の「よ」が里方言に取り込まれたものという可能性は考えられる。しかし、3.4節で挙げたネと異なり、談話資料中で標準語的な発話に偏って現れるということはない。また、面接調査で話者の内省がスムーズに得られた。そのため、本稿ではヨを方言の終助詞の体系の中に含めて分析している。

4.7. ソ

3.6節で述べたように、ソは面接調査でデータが得られなかったため、談話資料の例をもとに分析をおこなう。

里方言の談話資料は約5時間分を整備したが、その中でソは46回使われている。ただし、その46例のうち28例は非文末で間投助詞として使われたものであり、文末で終助詞として使われたものは少ない。

まず、間投助詞としての例を挙げる。（85）は接続助詞のバ、デー（それぞれ標準語の「ば」「から」相当）、（86）は格助詞のニ（標準語「に」相当）、（87）はとりたて詞のワ（標準語「は」相当）に後接した例である。ただし、（85）のバ、（86）のニ、（87）のワは、前の要素とあわさってクルリャー、ツクダニー、ゴラーという形をとっている。

（85）○○ワ　ヤッパイ　フトン　ニガゴイ　クルリャーソ、　ソガン　シテ　ダスタローデーソ。（○○（宿の名前）はやっぱり人が苦瓜をくれればさ、そのようにして（客に）出すんだろうからさ。）　（談話資料より）

（86）［もらい物の苦瓜で作った佃煮について］
ヤッパイ　○○ガ　シオイトヤーナカトン。　ツクダニーソ、　モロタトバ。
（やっぱり○○（宿の名前）がしているんじゃないか。佃煮にさ、もらったのを。）
（談話資料より）

（87）コン　ゴラーソ、　ネーサンガ　ニキー　イクゴト　ナッテカラ…
（この頃はさ、姉さんのところへ行くようになってから…）　（談話資料より）

ヨ、ナも間投助詞として使われるが（3.2節）、間投助詞ソ、ヨ、ナの意味的な違いは、明確にはわからない。例えば、（88）の例ではソとナが間投助詞として使われているが、この例からソとナの違いを理解するのは難しい。

（88）ホイタイバソ、　ソノ　サンニン　キヤイウチノ　イチバン　ウエノ　ネエチャンガナ　トイレニ　イク　タンビニナー　トイレノ　スリッパオ　キレーニ　ナラベモス

トヨ。（そしたらさ、その三人来られるうちの一番上の姉ちゃんがね、トイレに行くたびにね、トイレのスリッパをきれいに並べますのよ。）　（談話資料より）

そのため、本稿ではソが間投助詞として使われやすいということを示すにとどめ、意味的な特徴までは踏み込まずにおく。ヨ、ナと違うことを示すため、例文の標準語訳では「さ」という訳をあてているが、これはあくまで便宜的な訳である。

文末に生起したソについても、その意味を明確に理解するのは難しいが、おおむねド、ヨと同様に、聞き手にむけて情報を示す場合に使われるようである。

（89）［Bがホテルに勤めていたとき学校の校長先生の団体客が来た話］

A：ドコン　コーチョーセンセーノ。（どこの校長先生が？）

B：ソン、 ソラ　フクオカノソ。（その、そりゃあ福岡のだよ。）　（談話資料より）

（90）［AがBに苦瓜の漬物の作り方を教えている］

A：シオズケテ　ナイロンブクロニ　イレテ　オシトイトヨ。

（塩をつけてナイロン袋に入れて押してるのよ。）

B：アー　オイモ　ソガン　シテカナー。

（ああ、私もそのようにしておかないと。）

A：アシタ、 ソイテ、 ホンズキャー　スイトソ。

（次の日、そして、本漬けはするのよ。）　（談話資料より）

以上、談話資料のデータだけに頼ったため分析できることは限られるが、ソの特徴について述べた。間投助詞として使われることが多いこと、文末では聞き手にむけて情報を示す場合に使われることがわかる。

なお、近隣諸方言では、藤原（1985）が熊本県と大分県国東町における終助詞ソの例を挙げているが、いずれも命令文に生起した例であり、里方言のソと同類とは見なしがたい。

4.8. ナ（平叙のナ）

平叙のナは、おおむね標準語の終助詞「な」と同じ場合に使われる。（91）は独話場面で自分の感じたことをつぶやく例である。

（91）［一人で花を見ながら］アジロイカ　ハナヤイナー。（きれいな花だなあ。）

対話場面では、（92）のように聞き手に共感を求めたり、（93）のように自らの共感を示したり、（94）のようにその場で確認した情報を聞き手に示したりする場合に使われる。

（92）［一緒に花を見る友人に語りかけて］アジロイカ　ハナヤイナー。（きれいな花だなあ。）

（93）［「あの頃はよかった」という相手に同意して］ヨカッタナー。（よかったなあ。）

（94）［友人から時間を尋ねられ、自分の腕時計を見て］ニジヤイナ。（二時だな。）

このほか、ある程度の見込みをつけたことがらについて、聞き手に確認する場合にもナが使われる。例えば、(95) は、走っている子が聞き手の孫だと見込みをつけたうえで「お前の孫だな」と確認する例である。

(95) [運動会で走っている子を指差して]

アン　コガ　アンガ　マゴヤイナ。(あの子がお前の孫だな。)

以上のような場合に使われることから、平叙のナは標準語の「な」と同類のものと考えられる。ただ、標準語の「な」は、対話場面で使うとき男性語的な性格を持つが、里方言のナは男女の区別なく使われるようである。

5. 疑問文に生起する終助詞

疑問文に生起する終助詞には、カ、ナ (疑問のナ) がある。以下、5.1 節で他の終助詞との承接関係についてまとめ、5.2 節で意志文や勧誘文にも生起可能か確認する。そのうえで、5.3 節でカとナを比較しつつ双方の意味的な特徴について記述する。なお、本節で分析するナは、ことわりのない限り疑問のナである。平叙のナに言及する場合には、それが平叙のナであるむねを明記する。

5.1. 他の終助詞との承接関係

4.2 節で述べたことと重なるが、疑問の終助詞カには、ヨ、ソ、ナ (平叙のナ) の各終助詞が後接する。下に面接調査で得た例と談話資料の例をあわせて示す。なお、カナという承接におけるナは、疑問のナではなく平叙のナにあたるものと考える。カナは標準語の「かな」と同様に独話的な疑いを表すが、5.3 節で述べるとおり、疑問のナは聞き手への問いかけを表すもので、独話的な性格のカナとは意味的に矛盾するためである。

(96) [相手の質問に反発して] オイガ　ソガンタ　コト　シットイカヨ。

(俺がそんなことを知ってるかよ。)

(97) イマン　ナンチュモースカヨ。　コドクシオ　ユーモスバッテヨ。

(今の何と言いますか。「孤独死」を言いますけどね。)　(談話資料より)

(98) [方言の歌を歌おうとして]「イゴデッパ」チュー　ウタバ　ウターヤランカソ。

(「イゴデッパ」という歌を歌われませんか。)　(談話資料より)

(99) [太郎がちゃんと仕事に行くか心配して] イクカナ。(行くかな)

(100) [年をとってからの楽しみについて]

セーゼー　タノシムト　スレバ、 イマ　ユー　オンセングライカナ。

（せいぜい楽しむとすれば、今いう温泉ぐらいかな。）　（談話資料より）

ア、ター、ガ、ドがカに後接した例は、談話資料にも面接調査で得た例にも見られない[14]。また、承接の順序を逆にして、カ以外の終助詞がカの前に生起した例も見られない。

一方、平叙のナと違い、疑問のナについては、談話資料にも面接調査で得た例にも、他の終助詞と共起した例がなく、常にナが単独で使われている。平叙のナと疑問のナが全くの別形式だとすれば、カナと同様に、ナナという承接もありうるが、ナナという承接は存在しない。

（101）［太郎がちゃんと仕事に行くか心配して］*イクナナ。（行くかな）

5.2. 意志文・勧誘文・命令文への生起

カは、標準語の「か」と同様、意志文[15]、勧誘文にも生起するが命令文には生起しない。

（102）［一人で家にいる。晴れてきたので、そろそろ役場に］イコーカ。（行こうか。）

（103）［友人を誘って、一緒に旅行に］イコーカ。（行こうか。）

（104）［子どもにむかって。遊びに］*イケカ。（行け。）

一方、疑問のナは、意志文、勧誘文、命令文のいずれにも生起しない。ナという形式自体は勧誘文にも生起しうるが（4.2節）、その場合のナは疑問の意味にならない。つまり、平叙のナにあたるものといえる。

（105）［孫を誘って。一緒に海に］イコーナ。（行こうな。）

また、意志文、命令文にはナという形式自体が生起しない。

（106）［一人で家にいる。晴れてきたので、そろそろ役場に］#イコーナ。（行こうか。）

（107）［孫に注意して。あっちに］*イケナ。（行け。）

5.3. 意味的な特徴

ここまで、カとナの特徴について形の上からわかることを示した。本節では、それをふまえたうえで意味的な特徴を示す。先に結論を示すと、基本的に、カは独話的な疑いを表すときに、ナは対話上の問いかけをおこなうときに使われる。

次に示すのは、独話状況で話し手の疑いを表す例である。このような独話の場合、ナではなくカが使われる。

（108）［独話。店が閉まっていたので、不思議に思って］

キョーワ　ヤスミ｛カ／#ナ｝。（今日は休みか。）

標準語の「だろうか」と同様、推量形式ヨーに後接したヨーカという形で独話的な疑いの態度を表すこともある。

（109）［自問して。あいつは飲み会に］イクヨー｛カ／#ナ｝。（行くだろうか。）

（110）［家出した太郎を探して。うーん、あいつなら］

ドケー　イクヨー　{カ／*ナ}。（どこへ行くだろうか。）

ナという形式自体はヨーに後接可能だが、その場合のナは平叙のナにあたるもので「だろうか」相当の疑問文にはならない。例えば（109）でナが生起した場合、標準語の「行くだろうな。」に相当する平叙文として解釈される。（110）のように疑問詞とヨーナが共起することもない。

カは、意志・勧誘表現のウに後接する場合もある。

（111）［自問して。晴れてきたので役場に］イコー　{カ／＃ナ}。（行こうか。）

（112）［友人に話して。一緒に旅行に］イコー　{カ／＃ナ}。（行こうか。）

この場合も、ナを使うと標準語の「行こうな（行こうね）」と同様に聞き手に同意を求める意味になり、「行こうか」相当の疑問の意味とは見なせない。

このほか、終助詞という定義からは外れるが、カは間接疑問文の疑問節を示すときにも使われる。森・平塚・黒木編（2015:144）で示したように、推量形式ヨーも疑問節を示すことがあるので、あわせて例を挙げる。ナが疑問節を示すことはない。

（113）ダイガ　イク　{ヨー／カ／*ナ}　ワカラン。（誰が行くかわからない。）

（114）［あいつは］{イクヨー　イカンヨー／イクカ　イカンカ／*イクナ　イカンナ}　ワカラン。（行くか行かないかわからない。）

カが独話的な疑いを表す一方、聞き手に問いかけをおこなう場合にはナが使われる。まずはYes-No疑問文の例を挙げる。

（115）［友人に尋ねて］アシタノ　ケーローカイ　イク　{*カ／ナ}。（明日の敬老会行くか。）

（116）［友人に暖房の具合を尋ねて］コン　ヘヤ　ヌッカ　{*カ／ナ}。（この部屋は暖かいか。）

（117）［友人に尋ねて］ケーローカイ　イッキャッタ　{*カ／ナ}。（敬老会行かれましたか。）

標準語で「行く？」と尋ねるように、ナを生起させずに上昇調のイントネーションだけで疑問を表すことはない。この点は木部・久見木（1993）の述べる鹿児島市方言と同様である。

ナは、場合によってンという語形をとる。ンという語形になる条件は十分に明らかでないが、特に準体助詞トに後接した場合にトンという形をとりやすく、トナでは「やや不自然」と内省されることもある。

（118）［友人に暖房の具合を尋ねて］

コン　ヘヤ　ヌッカモス　{ナ／ン}。（この部屋は暖かいですか。）

（119）［来訪者に尋ねて］クルマデ　キヤッタ　{トナ／トン}。（車で来られたのか。）

（120）ケーローカイ　イッキャイモス　{?トナ／トン}。（敬老会行かれるんですか。）

なお、わずかではあるが、平叙のナがンという語形をとる例も談話資料に見られるため、これ

が疑問のナに限った事象とまではいえない。

（121）A：○○ヘンワ　「コッパモチニ　ムクサンモチニ　シロモチニ」テ　ユーテナ、ダシトイモイタトン。（○○（地名）のあたりは「こっぱ餅にモグサの餅に白餅に」って言ってね、出してましたのね。）

B：ウン。　オー　オー。（うん。おーおー。）　（談話資料より）

WH疑問文では、疑問詞によって疑問文であることが明示されるためか、文末にナが生起しなくともよい。面接調査では、むしろナが生起しない形が回答されやすかった。

（122）［相手に尋ねて］ドケー　イッキャイモスト。（どこへ行かれるんですか？）

（123）［相手に尋ねて］アン　フター　ダレヤイト。（あの人は誰なの？）

しかし、（124）のようにナが生起しても不自然ではないと内省されており、談話資料にもナが生起した例がある（下の例では語形がンになっている）。

（124）［集まりに誰が行くかを尋ねて］ダイガ　{イクト／イクトン}。（誰が行くの？）

（125）［最近の子どもの遊びについて］

A：ナンバ　シヨイトン。　モー　ガッコーデモ　サッカーグライノ　モンジャナカトン。（何をしているの？もう学校でもサッカーぐらいのものじゃないの？）

B：アー、　モー　サッカート　ヤキュー　ナンチューモストン。　ソフト。（あー、もうサッカーと野球。何て言いますか。ソフトボール。）

（談話資料より）

WH疑問文ではナが生起しないことも多いが、ナの生起が不適格なわけではないといえる。

以上、カが独話的な疑いを表すのに対し、ナが対話上の問いかけで使われることを示した。

ところで、カに似た意味を表す終助詞にカイがある。今回の調査ではカとの違いは確認できなかったが、カと同様に使われるので、例を挙げておく。

（126）アシター　ハレヤイヨーカイ。（明日は晴れだろうか。）

（127）カセーシモソーカイ。（お手伝いしましょうか。）

鹿児島県方言のカイについては、藤原（1985:419）が「非九州では、「カイ」の用法に「カ」の用法とは違ったものがありがちで、用法上では、両者の、区別されることが多い。しかし、薩隅地方では、「カイ」がしばしば、「カ」同然におこなわれている。」と述べている。カとの違いを精査する必要があるが、本稿では、ひとまずカと似た形式と考えておく。

6. 勧誘文に生起する終助詞

ここまでとりあげた終助詞のうち、ヨ、ナが勧誘文にも生起することは4.2節で述べた。この

ほか、勧誘文に生起する終助詞にヤがある。ヤは勧誘文だけに生起する終助詞と見られ、平叙文に生起した例は確認されない[16)]。同じイコーという形の述語であっても、話し手の意志を表す意志文には生起しない。

（128）［友達を誘って。一緒に旅行に］イコーヤ。（行こうよ。）

（129）［誰も行かないなら、私が］＃イコーヤ。（行こうよ。）

命令文にも生起しにくい。例えば、（130）の例では、まったくヤが使えないわけではないものの「標準語のようで不自然」という内省が得られた。調査した限り、命令文に生起する終助詞はヨだけである。

（130）［子どもを追い払って。あっちに］？イケヤ。（行けよ。）

ヤの意味については、同じく勧誘文に生起するヨ、ナと比較しながら考える必要がある。しかし、面接調査で勧誘文の例を十分に得ておらず、談話資料内にも例がないため、現時点では分析を保留する。意味的な特徴については、今後の調査を要する事項としたい。

7. まとめ

本稿では、里方言の終助詞について筆者らの調査で明らかになったことをまとめた。ここまで述べたことをあらためて整理すると、以下のとおりになる。

平叙文に生起する終助詞にはア、ター、ガ、ド、ヨ、ソ、ナがあり、それぞれの特徴を簡潔に示すと表2のようになる。また、図4のような順序で相互に承接する。

表2　平叙文に生起する終助詞の特徴

	意味	生起する文のタイプ	間投助詞としての使用	標準語で類似の終助詞
ア	気づき・思い出し	平叙文のみ	不可	汎性語の「わ」
ター	驚き・確認要求	平叙文のみ	不可	「じゃないか」
ガ	驚き・確認要求・情報の提示（聞き手に一方的態度）	平叙文のみ*	不可	「じゃないか」「よ」
ド	情報の提示（独話も可）	平叙文のみ	不可	「ぞ」
ヨ	情報の提示（聞き手が必要）	平叙・疑問・勧誘・命令文	可	「よ」
ソ	—**	平叙・疑問文**	可	不明
ナ	共感・確認	平叙・疑問・勧誘文	可	「な」

* 話者によっては勧誘文での生起を適格とすることがある。
** ソの意味的特徴は未分析。平叙・疑問文以外での生起の適格性は未確認。

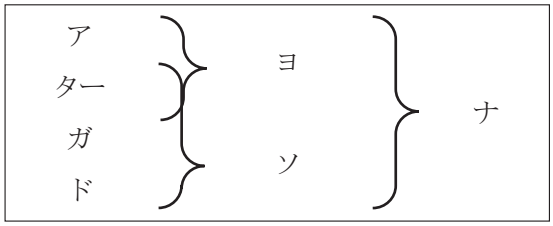

図４　平叙文における終助詞相互の承接関係（図３の再掲）

疑問文に生起する終助詞にはカとナがある。カは独話的な疑いを表したり、疑問節を示したりする場合に使われる。カの後には終助詞ヨ、ソ、ナが後接しうる。カは意志文、勧誘文にも生起する。一方、ナは聞き手への問いかけをおこなう場合に使われる。疑問のナの後に他の終助詞が後接することはなく、常にナ単独で使われる。疑問のナは意志文、勧誘文に生起することはない。

このほか、勧誘文だけに生起する終助詞ヤがある。勧誘文にはヨ、ナも生起しうるが、勧誘文におけるヤ、ヨ、ナの意味的な違いについては今後の調査を要する。

以上、筆者らは里方言の母方言話者ではないため、手探りのような状況で調査を進めたが、各終助詞の生起する文のタイプ（平叙文、疑問文、勧誘文など）や終助詞相互の承接関係、各終助詞のおおよその意味など、里方言の終助詞の全体像について一定の記述はできたものと考える。終助詞の分析は母方言話者の内省に頼るところが多く、研究者自身が母方言話者の場合に大きな利点がある。しかし、非母方言話者による限られた期間のフィールドワーク調査であっても相応の記述は可能であろうと考える。

ところで、本稿では面接調査で得たデータを中心に分析を進めたが、談話資料のデータも十分に活用した。特に、ソについては、談話資料を整備しなければ、その存在そのものを見落としていた可能性がある（3.6節参照）。一方で、面接調査のデータが不可欠なのは言うまでもない。ソの記述は、談話資料の例だけに頼ったため粗いものにならざるをえなかった。面接調査を軸にしつつ、談話資料も可能な限りで整備することが、他の言語項目と同様、終助詞の記述にあたっても大きな意味を持つといえるだろう。

また、終助詞の包括的な記述にあたっては、その方言で使われる終助詞を網羅的に把握するのが難しいことを認識する必要がある。終助詞ソの存在を見落としかけたのは上記のとおりだが、そのほか注２～注４で挙げたとおり、平叙文ではクサ、バイ、疑問文ではヤ、勧誘文ではイ、ニという終助詞が使われる可能性がある。これらの終助詞に関する記述は未着手の課題として残ってしまった。使用頻度の低い終助詞は面接調査で話者の意識に上がりにくく、談話資料にも例が出てきにくいだろう。そのような終助詞の存在に気づき、分析をおこなうためには、

談話資料の整備や共同研究者との情報共有を早期におこなうことが必要であったというのが、今回の調査の反省点である。

本稿では里方言の終助詞について包括的な記述を試みた。一定の記述はできたと考えるが、個々の終助詞の特徴については、より深い記述に踏み込む余地が残されている。一方、本稿の記述を一事例として、他の方言の終助詞に記述を広げてゆくこともできるだろう。この記述を足がかりに、さらに深く、あるいは広く、今後の研究を展開させてゆくことを視野に入れつつ、現時点で明らかになったことの総括として本稿をまとめた。

付記

本研究は、人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」のサブプロジェクト「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」（研究代表者：窪薗晴夫）による。このプロジェクトでは、大阪大学・九州大学を中心に、大学院生などの若手研究者14名による共同調査班を組織し、甑島方言の文法調査をおこなった（森・平塚・黒木編2015参照）。

本稿は、そのうち筆者ら４名が実施した終助詞関連の調査をもとにしている。調査後、終助詞ター、ガ、カ、疑問のナについては野間、その他の終助詞や相互承接については白岩が結果を整理・分析した。本稿は、それをもとに白岩が全体をまとめて執筆したものである。

本文中に示したとおり、執筆にあたっては共同調査班の他メンバーから有益なデータや助言を得た。特に、平塚雄亮氏（志學館大学講師・阪大日本語学講座修了生）からは、草稿を通読のうえで丁寧な助言をいただいた。なお、各氏の肩書きは執筆時現在のものである（調査当時は大学院生等であった）。

調査にあたっては里集落内の数多くの方から協力を得た。最後に深く感謝を申し上げたい。

注

1）標準語の終助詞「な」が「なあ」になるのと同じく、里方言の終助詞も母音が長く引き伸ばされる場合があるが、本稿では母音の長短を区別せずに考える。ただし、ターは、常に母音が２拍分引き伸ばされるので、タではなくターと表記する。

2）ソのほかに、面接調査で確認されなかった終助詞として、談話資料にクサという形式が２例（間投助詞の例を含む）、バイという形式が４例見られた。バイは４例とも準体助詞トに後接した例であった。

（例）モー　オマイ　モー　アノ　ア　<u>ソイクサ</u>　ニサンシューカンワ　マー…

（もう、お前、もう、あの、あ、それだよ。二～三週間は、まあ…）　（談話資料より）

（例）<u>ソレデクサ</u>、　ボランティアカツドーヤイモス。

（それでさ、ボランティア活動です。）　（談話資料より）

（例）「エラカナー」テ　<u>オンムートバイ</u>。（「偉いなー」と思うのよ。）　（談話資料より）

（例）ヤッパイ　ムカシン　フトン　イーヤイター、　ステチャ　<u>ナラントバイ</u>。

（やっぱり昔の人の言われることは、捨てちゃならないのよ。）　（談話資料より）

しかし、得られた例がわずかなため、クサ、バイの分析はおこなわない。面接調査で回答されなかったのを考えても、クサ、バイの使用頻度は低いと考えられる。一方で、ソは46例と多くの用例があったため、本稿

の分析対象とした。

なお、共同調査をおこなった平塚雄亮氏（志學館大学）から、調査で得た話者の内省として（a）バイは準体助詞トにしか後接しない、（b）バイにはバという異形態がある、という情報を得ている。バイについては、この程度の断片的なことしかわからないが、付記しておく。

3） カイという形式もあるが、カに含めて考える（5.3節参照）。また、面接調査では確認されなかったが、談話資料に疑問を表すヤという終助詞が1例見られた。

（例）［近所の人がお礼の品を持ってきたという話題］

A：ソイタイバ、 ヤッパイ　アイバ　モッテ　キトッタ。（そしたら、やっぱりあれを持って来てた。）

B：センザイヤ。（洗剤？）

A：アノー、 フロノー…（あの、風呂の…）　（談話資料より）

しかし、得られた例がわずかなため、ヤの分析はおこなわない。鹿児島市方言の疑問の終助詞ヤ（木部・久見木1993参照）と同類のものと思われるが、面接調査で回答されなかったのを考えても、里方言における終助詞ヤの使用頻度は低い可能性がある。なお、勧誘文に生起する終助詞ヤは、この疑問文生起のヤとは別物と見なし、面接調査で得た例をもとに6節で記述する。

4） 筆者らの面接調査では確認できなかったが、共同研究者の藤本真理子氏（尾道市立大学）、岩田美穂氏（就実大学）らによる指示語、副詞節の調査で勧誘文に終助詞ニ、イの生起した例が得られている。

（例）アイケー　ウツローニ。（あそこに移ろうよ。）　（森・平塚・黒木編2015:162）

（例）シゴトン　アガッタナラ、 ダイヤミ　スーイ。

（仕事が終わったら、飲み会にしよう。）　（森・平塚・黒木編2015:173）

しかし、詳しい調査はおこなっておらず、談話資料にも用例が見られないため、ニ、イの分析はおこなわない。藤原（1982; 1985）によると、ニ、イともに鹿児島県内の諸方言で使用が見られる形式なので、里方言でも使用される可能性はある。

5） 終助詞アについては、そもそも「キューワ」という表現にアを後接した形式が想定できず、話者からスムーズな内省が得られなかった。そのことをふまえ、不適格と見なした。

6） 木部・久見木（1993）によれば、鹿児島市方言の質問文は非上昇調のイントネーションが普通とされる。筆者らの調査でも、イントネーション面まで精査はしなかったものの、疑問文はおおむね下降調のイントネーションをとるように観察された。また、木部・久見木（1993）は「配慮」や「親切」を特に表す場合は質問文が上昇調になることを示している。里方言でも、場合によっては疑問のナが上昇調をとりうることを話者の内省から確認したが、上昇調のイントネーションが特別な「配慮」を表すかまでは確かめていない。

7） 森・平塚・黒木編（2015:33）の音の交替規則（12）。

8） 森・平塚・黒木編（2015:42）の音の交替規則（54c）。

9） 承接関係についても面接調査はおこなった。下に挙げるのは、動詞イク（行く）を述語にした文について、特に文脈は定めず、2つの終助詞を重ねて使うことができるか尋ねた結果である。なお、ソは、3.6節で述べたとおり面接調査のデータがないため、この例文に含まれていない。

（例）a. イカー｛*ター／*ガ／*ド／ヨ／*ナ｝。　《アへの承接》

b. イクター｛*ア／*ガ／*ド／%ヨ／*ナ｝。　《ターへの承接》

c. イクガ｛*ア／*ター／*ド／%ヨ／*ナ｝。　《ガへの承接》

d. イクド｛*ア／*ター／*ガ／*ヨ／%ナ｝。　《ドへの承接》

e. イクヨ｛*ア／*ター／*ガ／*ド／ナ｝。　《ヨへの承接》

f. イクナ {*ア／*ター／*ガ／*ド／*ヨ}。 《ナへの承接》

この面接調査の結果は、アナ、ガナ、ターナという承接が不適格とされる点で、談話資料の状況と食い違っている。また、%の記号で示したが、内省に個人差のある例もある。この点については、単に2つの終助詞を重ねて使えるかという抽象的な質問に、話者が十分に内省をはたらかせられなかった可能性が考えられる。

このことから面接調査に頼るのは危ういと判断したため、また、ソも含めて記述するため、終助詞の相互承接については談話資料をもとに分析した。本稿に先立つ森・平塚・黒木編（2015:153-154）では、面接調査の結果をもとに記述したが、その記述は本稿をもって改めたい。

10）このほか、ガヨという表現で、ガが終助詞のガとも接続助詞のガともとれる例が数例あった。終助詞ガにヨが後接した確実な例とはいえないため、それらの例は分析から除いている。

（例）ソイバ　カテテ　クテ　ピューテ　イキオイモーイタサイガヨ。　オマイサマー、　ココン　コドガガッコーニ　ズイ　トーキヤイナー。（それを混ぜて食って「ぴゅー」と行ったんじゃないですか／行ったんですけどよ。あなた、ここの子どもが学校に出るときだなあ。）（談話資料より）

11）ガ、ド自体は独話でも使えるが、この文脈でガ、ドを使うと独話に感じられないと内省された。

12）ただし、独話で自分の行動を表すときにはアは使えない。あくまで、それを聞き手に示す場合に使われるようである。この点、服部（1992）の述べる「汎性語」の終助詞「わ」と似ている。

（例）a.［一人で仕事を始めようとして］＃キバラー。（がんばるぞ。）

b.［がんばって仕事をするよう言われて］キバラー。（がんばるよ。）

13）ターは準体助詞のトにとりたて詞のワが後接して縮約した形ター（トワ→ター）と、ガは接続助詞のガと区別がつきにくい例があるが、それらを除き、確実に終助詞と見なせる例だけを数えた。

14）カの母音が引き伸ばされて「カー」となった例はあるが、母音の短い「カ」の場合と意味的に違いが感じられないため、「カー」を、カに終助詞アが後接したものとは見なさなかった。

15）本稿では「私が行こう。」のように動詞にウが後接して話し手の意志を表す文を「意志文」とする。「私が行く。」のように、話し手の行動を表していてもウが生起しないものについては平叙文と見なす。なお、調査した限り、意志文にはカ以外の終助詞は生起しない。

16）注3に示した疑問を表す終助詞ヤは勧誘文生起のヤとは別物と考える。

参考文献

井上博文（1999）「熊本県砥用町方言の方言文末助詞〈文末詞〉の記述」『学大国文』42，pp.1-22，大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座.

井上優（1995）「方言終助詞の意味分析―富山県砺波方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」―」『国立国語研究所報告110研究報告集16』，pp.161-184.

井上優（2002）「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21（2），pp.48-57.

井上優（2006）「モダリティ」『シリーズ方言学2　方言の文法』pp.137-179，岩波書店.

太田一郎（2001）「鹿児島若年層話者方言のヨとガ―ネオ方言の記述法を考える―」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』53，pp.37-59.

大野仁美（2010）「南紀方言における終助詞「ヨ」の意味機能分析試論」上野善道編『日本語研究の12章』pp.210-223，明治書院.

木部暢子・久見木大介（1993）「鹿児島市方言の質問のイントネーションについて」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』38，pp.19-34.

渋谷勝己（2016）「山形市方言の文末詞の相互承接」『阪大日本語研究』28，pp.1-21.
田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152，pp.123-109.
坪内佐智世（2001）「福岡市博多方言の終助詞「タイ」の多様性について」『福岡教育大学紀要　第1分冊　文科編』50，pp.47-58.
日本放送協会編（1967）『全国方言資料　第9巻　へき地・離島編Ⅲ』日本放送出版協会.
野間純平（2011）「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大社会言語学研究ノート』9，pp.30-45，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
服部匡（1992）「汎性語の終助詞ワについて」『同志社女子大学学術研究年報』43（4），pp.267-281.
平川公子（2008）「福岡市方言における文末詞バイとタイ」『阪大社会言語学研究ノート』8，pp.116-131，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
藤原与一（1982）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（上）』春陽堂書店.
藤原与一（1985）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（中）』春陽堂書店.
藤原与一（1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』春陽堂書店.
松岡みゆき（2010）「汎性語の終助詞「わ」の意味について」『名古屋大学日本語・日本文化論集』18，pp.23-47.
松丸真大（2008）「文末詞「ガ」対照の試み」山口幸洋博士の古希をお祝いする会編『山口幸洋博士古希記念論文集　方言研究の前衛』pp.195-212，桂書房.
三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89，pp.111-122.
森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦編（2015）『甑島里方言記述文法書』（大学共同利用法人人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト（研究代表者・窪薗晴夫）「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」研究成果報告書）.

白岩広行（上越教育大学講師・元助教）
門屋飛央（九州大学大学院人文科学府博士後期課程学生）
野間純平（島根大学講師・博士後期課程修了生）
松丸真大（滋賀大学准教授・元助手）